

## 三河地方煉瓦生産地における地域産業をいかしたまちづくり活動

Town Planning Utilizing Local Resources in a Brick-Producing Region of Central Aichi Prefecture

水 野 信 太 郎

Shintaro MIZUNO

### 研究の目的と意義

わが国において第二次世界大戦後の高度経済成長期を境として、それ以前とそれ以降では全国各都市の様相に大きな変化が生じた。さきの第二次世界大戦よりも前には、帝都や商都など極めて一部の地域を除けば、各地に特徴的な固有の建築様式や建造物群による生活環境が見られていた。その上それらの建築物は決して仮普請的な建築構造ではなく、よく風雪に耐えて長い年月を生き続け、住み手や使い手から十分に使い込まれるまで耐えることのできる存在であった。

しかし不幸にして日本の主要な大都市は、ことごとく戦災によって燃え尽きてしまう。空襲によって焦土と化した国土は、慢性的な住宅不足の状態に陥った。このため敗戦後の住宅政策は、ごく最近まで個々の建築物の質が大きく問われることはなく、量すなわち建設戸数の多さ棟数だけを最優先することとなってしまう。

やがて高度経済成長期を迎えると、ひとつの“美徳”が神話のようにして信じられる時代となる。その内実は「消費は美徳なり」の言葉通り、物を使い捨てる行為であった。この発想によって推進された各地方都市の基盤整備・環境保全・地域開発の基本的方針は、きわめて画一的なものになる。その基本的な姿勢は「長持ちする建築物」を求める方向ではなく、スクラップ アンド ビルトというものであった。つまり厚みのない現代建築を、単に拡大再生産することの繰り返しであった。その結果、全国に類似の都市景観がつくりだされることとなる。日本中どこへ旅しても代わり映えのしない駅前広場が、大量に出現した。

近年のまちづくりは上記のような現状を反省して、各地域が固有する風土、歴史、文化そして地域産業をいかそうとする方向に転じている。他の都市や地域社会では実践することが難しい、その土地固有の景観整備やまちづくりを志向するものなのである。

本研究にあっては、国産煉瓦の半数を毎年ごとに製造し続けている愛知県中央部のまちづくり活動を詳細に観察することとする。その結果、愛知県三河地方の煉瓦をいかしたまちづくりと北海道江別市における同じく煉瓦に関わるまちづくりの相違点や逆に共通性などが浮かび上がるものと考えられる。この研究によって両地域でのまちづくり活動の先進性や、反対に立ち遅れた点ほかを明らかにすることができる。したがって本研究の成果は、今後の都市整備手法に幾つかの具体的な指針を与えることとなろう。

次に煉瓦を活用したまちづくりに関する先行研究を概観しておきたい。管見に過ぎないが、この学問領域における研究成果は極めて少ないと言わなければならない。歴史的煉瓦造建築の魅力をいかしながら都市空間の整備を進めつつある各地の活動の事例集が、わずかに公刊されている程度に過ぎない。この種的话题を日本全国の範囲で取り扱った文献としては『RED B R I C K 赤煉瓦ネットワーク物語<sup>1)</sup>』1冊のみである。京都府全域と滋賀県の一部を含む歴史的な煉瓦建築物の現状と、京都府舞鶴市におけるまちづくりの経緯を記しているのは『京都の赤レンガ<近代化遺産><sup>2)</sup>』である。また京都府舞鶴市の現況に関しては『舞鶴の近代化遺産<sup>3)</sup>』が詳しい。さらに江別市の例をあげれば『江別れんがアラカルト れんがの建物・道・公園<sup>4)</sup>』という好書がある。

## 研究の方法

本研究をすすめる手順は、数年来「煉瓦とまちづくり研究会」という活動を継続しているグループの実体を見つめることから始めたい。「煉瓦とまちづくり研究会」は、愛知県碧南市の市議会議員団の有志と全愛知県赤煉瓦工業協同組合の両者から構成されている。「煉瓦とまちづくり研究会」を構成する碧南市議会議員の方々は、市議会議員としては若手の当選2回ないし1回の新しい会派を中心とする。

一方の愛知県赤煉瓦工業協同組合は、同県内の碧南・安城・西尾・豊橋という4市と丹羽郡大口町の1町に所在する煉瓦製造会社9工場が組織する組合である。しかし現在「煉瓦とまちづくり研究会」のメンバーとして活動に参加しているのは、煉瓦会社のうち実質的に碧南・安城・西尾3市の6社である。その最大の理由は、これら6箇所の煉瓦会社だけが、次時代を担うべき後継者を若手経営者として育てつつあるという事実に基づく。

研究の方法としては、まず第一に「煉瓦とまちづくり研究会」に参加し、屋外での見学会などには出来るだけ同行することとした。見学会などの集いに加わって現地を踏査した折には、同地の現況を可能な限り理解するよう努めた。そして該当する都市と建築物の歴史を調査研究する。その新しい知見を得るための具体的な方法は、文献調査を中心とするが、さらに現地で聞き取り調査をも実施する。

同時に現地踏査にあたっては、建築物を詳細に観察する。建築物と周辺環境との関係、建築物のディテール・細部の納まり、建築材料の特性などを見極める確認作業をする。さらに煉瓦造建築物などの現況を見て、活用のされ方ほかを評価することも重要なポイントである。現状の再利用方法に問題はないか、保存工事の仕方は適切であったか否かなどである。

次の作業として、江別市との比較を試みることも忘れてはならない。まちづくり活動、行政の姿勢、煉瓦製造会社からの働きかけ、これらすべての動きと各市を取り巻く周辺環境条件の違いなどを整理しておく必要がある。

最後に北海道や東海地方に限らず全国的な範囲で、赤煉瓦の建築物を再利用している用途や手法など、より多くの事例をきちんと積み上げておく行為も重要である。この分野のデータの

集積は、今後さまざまな点において有益な示唆を私たちに与えてくれるものとなろう。以上のような調査研究の手順を積み重ねることによって、北海道江別市や愛知県三河地方のみに限らず日本全国において、赤煉瓦をいかした良好で個性的なアイデンティティーあふれる都市景観の創出やまちづくりの推進が展開されるものとする。

## 研究の結果

以下、「煉瓦とまちづくり研究会」による平成13年度の活動状況を順をおって記述する。本稿では平成13年5月から同年の11月までの活動実績と平成14年1月と3月の活動計画を報告する。「煉瓦とまちづくり研究会」の発足は、平成9年（1997）4月と聞いている。この研究会が発足する経緯には次のような催し物があった。それは発足の半年ほど前、同8年（1996）10月19日（土）と翌20日（日）の両日にもたれた「第6回赤煉瓦ネットワーク愛知大会」を、全愛知県赤煉瓦工業協同組合が中心となって、愛知県碧南市で開催したことに起因する。この全国大会において愛知県安城市長、同高浜市長、同西尾市長、同碧南市長、同半田市長（環境経済部長）そして北海道江別市長（経済部長）が揃ってステージに登壇し、わが国で初めての「赤煉瓦サミット」を成功させた。このような実績から以後、地元では行政側（市議会）と市民側（生産者）との協力のもと、地域産業のひとつである煉瓦を積極的に使ったまちづくりを模索してきたのである。

本年度の「煉瓦とまちづくり研究会」の構成メンバーは次のような方々である。碧南市議会議員の鰐本達朗氏、同じく樫山光徳氏、同じく禰宜田政信氏、同じく木村健吾氏、同じく倉内成幸氏、同じく原田ちよ子氏、同じく鈴木宏枝氏、同じく鈴木実則氏、同じく磯貝幸雄氏、同じく村田峰治氏、同じく杉浦郁雄氏、同じく陣弓騎昌氏、同じく久田昭一氏、同じく宮地孝次氏、株式会社岡田煉瓦製造所（安城市根崎町）の岡田敏夫氏、株式会社三島煉瓦製造所（安城市福釜町）の三島文弘氏、株式会社榊原製陶所（西尾市寺津町）の榊原孝夫氏、鈴木煉瓦株式会社（安城市南町）の鈴木重敏氏、長谷煉瓦株式会社（碧南市金山町）の長谷池人氏、岡本煉瓦株式会社（碧南市堀方町）の岡本耕也氏、そして全愛知県赤煉瓦工業協同組合事務局の小島民子氏の全21名である。このような会員によって、隔月の学習会や見学会が企画され順次開催されている。

本年度最初の会は、平成13年（2001）5月29日（火）の午後に実施された。当日の正午に碧南市役所へ集合した後、バスで出発した。知多中央道の阿久比インターチェンジから名古屋都市高速道路を経て、現在の名古屋市市政資料館（写真－1参照）の見学を行なった。

この歴史的な煉瓦造建築物は、名古屋市東区白壁町1丁目3番地にある。かつての司法省営繕課の設計（山下啓次郎・金刺森太郎・加藤和夫が担当）で、旧名古屋控訴院のちの名古屋高等裁判所として大正7年4月に着工し、同11年の9月に竣工している<sup>5)</sup>。昭和54年まで名古屋高等裁判所・同地方裁判所・同家庭裁判所として使用されていた。その年に同裁判所が別の敷地に新築・移転したため、以後は解体され公園として整備される計画であった。

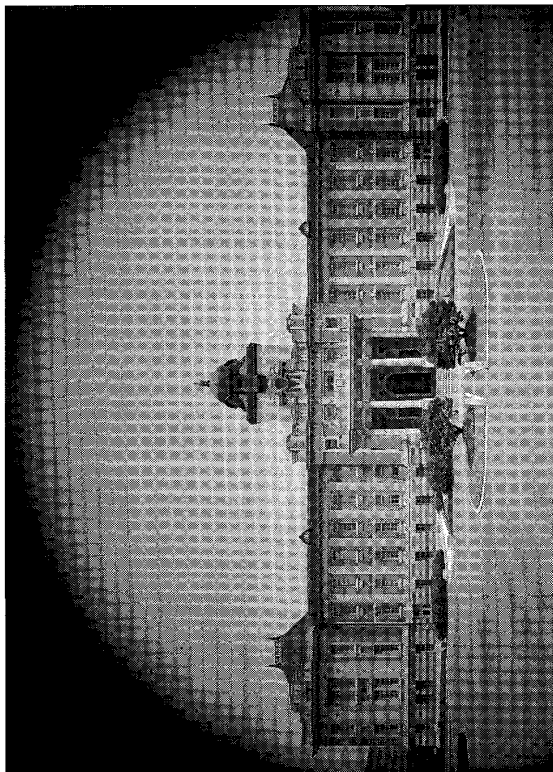


写真-1 名古屋市市政資料館正面外観

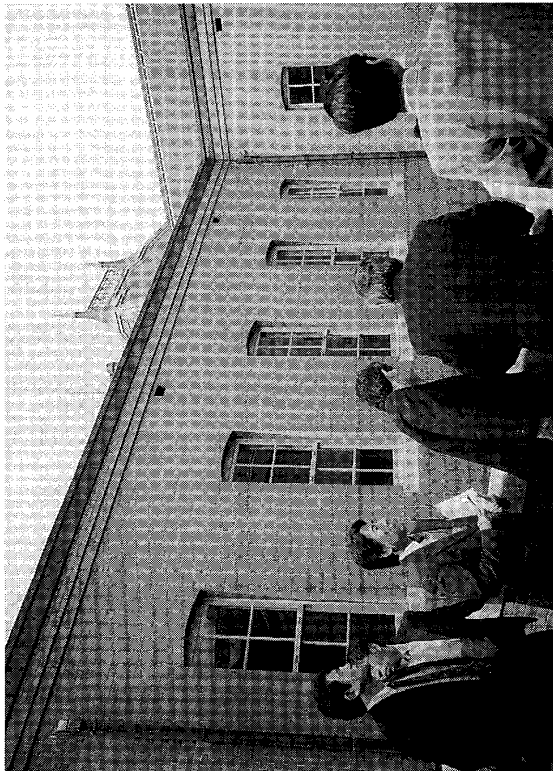


写真-3 同資料館東翼3階屋上と中庭

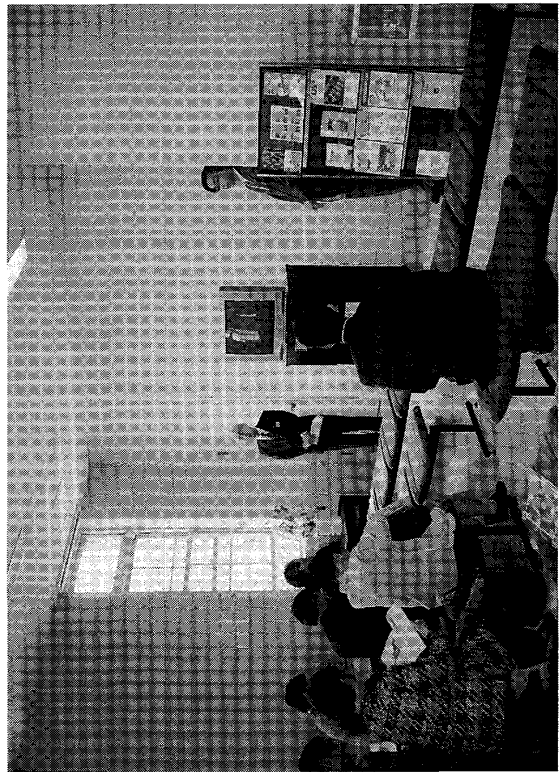


写真-2 同資料館西翼2階隅の休憩室

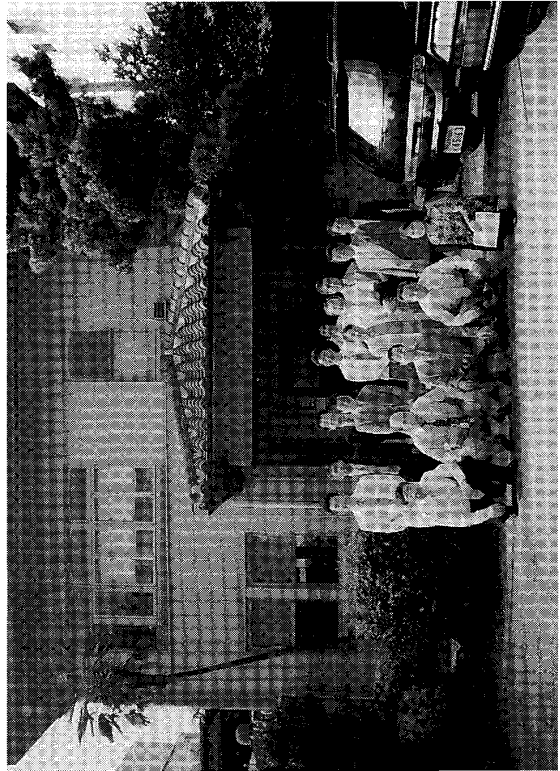


写真-4 名古屋市東区槇木町の槇木館



写真-5 名古屋工業大学旧汽缶室の外壁

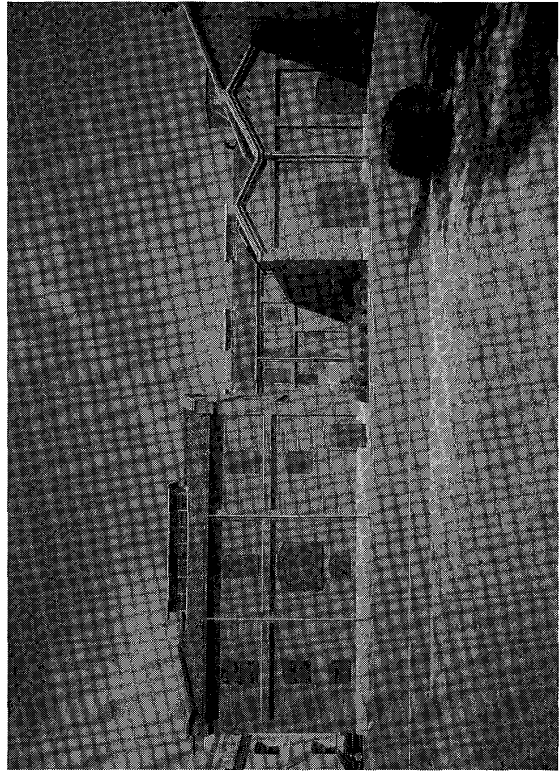


写真-6 ノリタケカンパニー旧製土工場

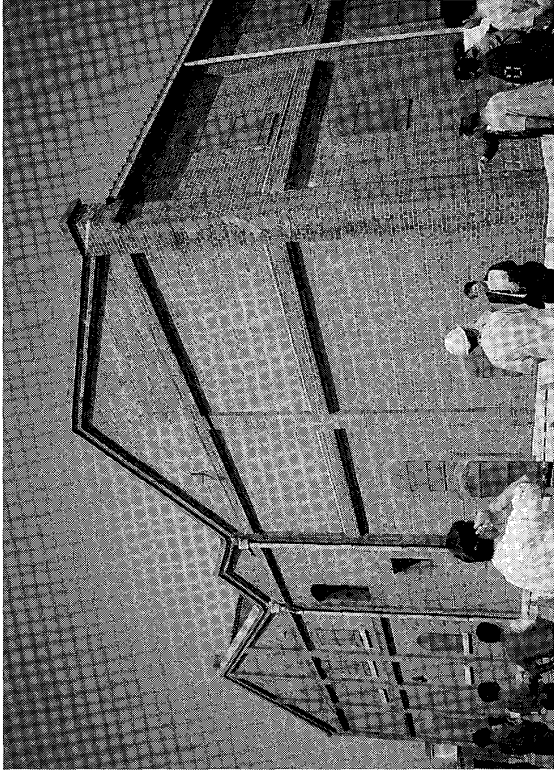


写真-7 同社旧製土工場整備工事の現況

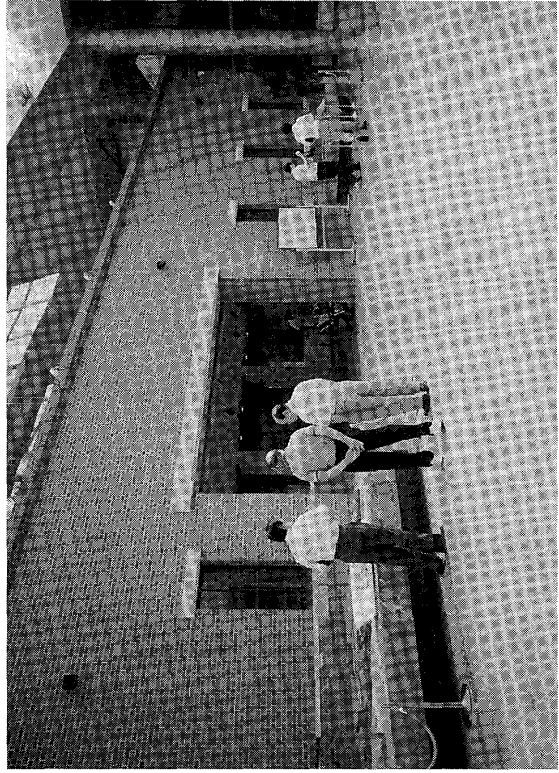


写真-8 産業技術記念館エントランスロビー



そのような計画に対して地元地方公共団体の若手職員グループから保存すべきではないのかという声があがり、幾多の困難を解決して結果的に今日見られるような姿となった。名古屋市市政資料館にするための保存修理工事は、昭和60年代から平成元年にかけて実施された。同館は毎週月曜日を閉館日としているので、今回の見学会は火曜日に設定した。

平成13年5月29日の見学会においては、名古屋市市政資料館副館長の神谷修氏が自ら案内して下さった(写真-2参照)。そのうえ建築技術的な説明をするためにと、財団法人名古屋都市整備公社総務部建設課の谷口孝建設係長も駆け付けられた。写真-3は名古屋市市政資料館の東翼3階から中庭に面した屋上に出て説明を受けているようすである。写真の左から3人目が谷口氏で、左側の2名は全愛知県赤煉瓦工業協同組合の会員、背中を見せている右側の3人が碧南市の市議会議員団メンバーである。なお谷口孝建設係長は現在、本務として名古屋市の都心に位置する久屋大通(通称100m道路)とNHK名古屋放送センタービル・愛知芸術文化センターの間で整備工事中の仮称：栄公園を担当しておられ、そちらの資料も当見学会の席上で紹介された。

この日は名古屋市市政資料館の見学だけではなく、同資料館の東側一帯に位置する名古屋市東区の槿木町(しゅもくちょう)および主税町(ちからまち)周辺を散策した。このエリアは日本近代にあって中京経済圏における高級住宅街が成立した場所である。豊田グループなどの創業者一族やその他にも経済史・芸能史に名を残す人々の邸宅が集まっていた。今回の見学会では、槿木町の槿木館と主税町の旧豊田佐助邸を外観から見た。写真-4に掲げる槿木館は、かつて陶磁器の海外貿易で富みを得た商家の邸宅として、大きな和館と共に瀟洒な洋館が建てられたものを、自動車デザイナー伊藤晴彦氏(AT DESIGN)が活用している事例である。写真-4が「煉瓦とまちづくり研究会」平成13年度第1回見学会の参加者で、前列は全員が碧南市議団、中列の大半も市議会議員で、全愛知県赤煉瓦工業協同組合の会員は後方に多く立っている。

第1回見学会から2か月ほど経過した時点で、本年度2回目の会がもたれた。平成13年7月10日の火曜日に再び名古屋市内の赤煉瓦を外観に顕(あらわ)にする“赤煉瓦建築”の見学会が実施された。この日の1箇所目の見学先は、名古屋市昭和区御器所町(ごきそちょう)にある名古屋工業大学のキャンパスである。同大学は国立の工業大学で、その前身は明治38年(1905)に創立された官立の名古屋高等工業学校である。この大学は第二次世界大戦下の空襲やそれ以前の失火による焼失などを経験しているものの、高等工業学校時代から敷地を移転することを一切しておらず、このため歴史的な痕跡も幾分かは残存する。

赤煉瓦の壁体として記念碑的に残されている遺構が1物件だけある。それは明治40年(1907)に竣工したとされる、名古屋高等工業学校の機械科機関汽缶室<sup>6)</sup>である。当該建築物の機能は名称から判断して、スチーム・エンジンの熱源であるボイラー関係の設備を収納しておくための煉瓦造建築物であったと考えられる。設計者は久留正道(くる・まさみち)だと伝えられる。久留は工部大学校(こうぶだいがっこう)造家学科(ぞうかがっか)の第3回卒業生として、

明治14年5月に学窓を巣立った建築家である。工部大学校とは文部省管轄の大学ではなく、当時明治政府に置かれていた工部省が高級エンジニア養成の目的で開学した直轄校であった。その大学校の造家学科は、現在の東京大学工学部建築学科の前身にあたる。なお久留は学校建築の専門家として、全国の大学や旧制高等学校校舎の洋風建築を作品として多く残している。

そのように本格的西洋建築教育を受けた建築家の手になる旧名古屋高等工業学校機械科機関汽缶室であったが、昭和20年に第二次世界大戦の空襲を受け、赤煉瓦の外壁だけが残されるといふ時代を迎える。終戦後この壁体に新しく昭和期の屋根を架け渡して、その後長らく使用していた。その建築物を昭和53年に解体した。この時点での解体理由は、当該建築物が大学正門を入った正面脇の良好な場所に建てられており、その場所の利用価値が高くキャンパスを整備する際の支障になったからである。

このため写真－5に示すような1スパン分の赤煉瓦外壁をキャンパス内の片隅へ移転した。なお、この名古屋工業大学キャンパス内には、建築家・鈴木禎次の記念碑が残されている。鈴木禎次は名古屋高等工業学校建築科の初代主任教授で、写真－15に示した煉瓦造の銀行建築のほか、木造をも含めて邸宅や商業建築などの作品を数多く設計したプロフェッサー・アーキテクトである。

本年度第2回見学会2棟目の見学先は写真－6ならびに写真－7に掲げる、ノリタケカンパニーリミテド本社内の旧製土工場<sup>7)</sup>である。当工場は名古屋市西区則武新町3丁目1番36号に位置する、明治37年の竣工とみられる窯業施設の1棟である。この赤煉瓦建築は外観から見受けられる以上に内部は多層の構造物で、室内は3階建てである。稼働していた時はダムウェーターを用いて、まず最上階に原土を運び上げるのを基本としていたと考えられる。そののち下階へ原料を落としつつ、その工程の中で洋食器に使うことのできる土を整えていた製土工場である。

今回の見学に際しては、ノリタケサービスエージェンシーの小林啓克社長が案内して下さった。現在、当本社工場は同社の創立百周年記念事業「ノリタケの森」建設のための周辺整備工事の最中であった。ただし旧製土工場については外構を整備するのみで、当面は赤煉瓦の外観を意匠・景観要素として活用するに止まるようである。なおノリタケカンパニー旧製土工場に積まれている当初材の煉瓦は、この「煉瓦とまちづくり研究会」と全愛知県赤煉瓦工業協同組合のメンバーである、安城市内の岡田煉瓦製造所<sup>8)</sup>で約100年前に焼かれた製品である。

第2回目見学会最終の見学先は、ノリタケカンパニーリミテドの隣に位置する産業技術記念館<sup>9)</sup>であった(写真－8参照)。その正確な所在地は、名古屋市西区則武新町4丁目1番35号である。この工場群は織機の発明家であった豊田佐吉が創業した繊維機械製造の工場跡である。工場建築としての竣工は、明治44年とさく。当記念館は豊田グループ15社が、ものづくりの技術と精神を広く伝えたいという目的から開館した展示教育集会施設である。元来の赤煉瓦を積み上げた工場建築を巧みに活かしながら、今日の用途として必要な空間を確保している。

本年度「煉瓦とまちづくり研究会」の第3回目の活動は、平成13年(2001)9月17日(月)

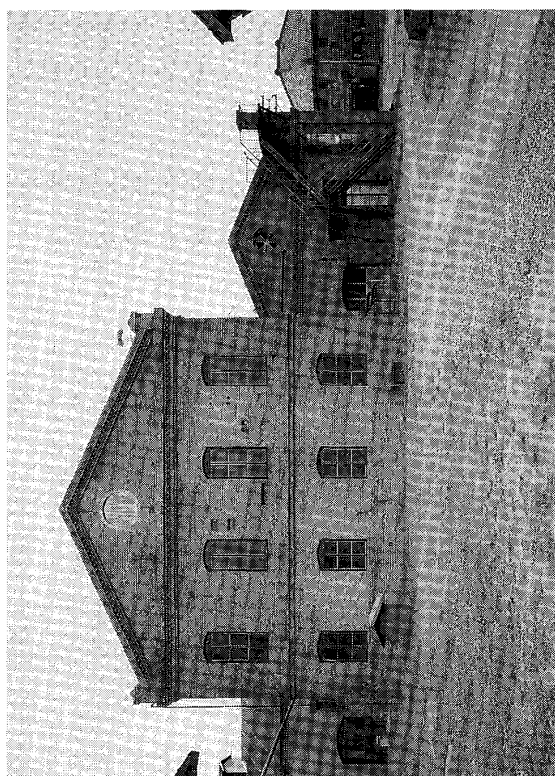


写真-11 北河製品所塗料倉庫と事務所

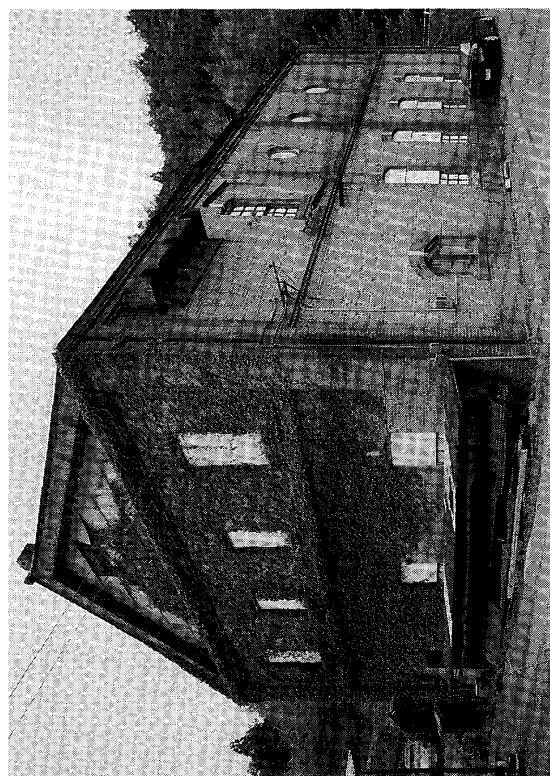


写真-12 旧地名発電所西側妻面と南面

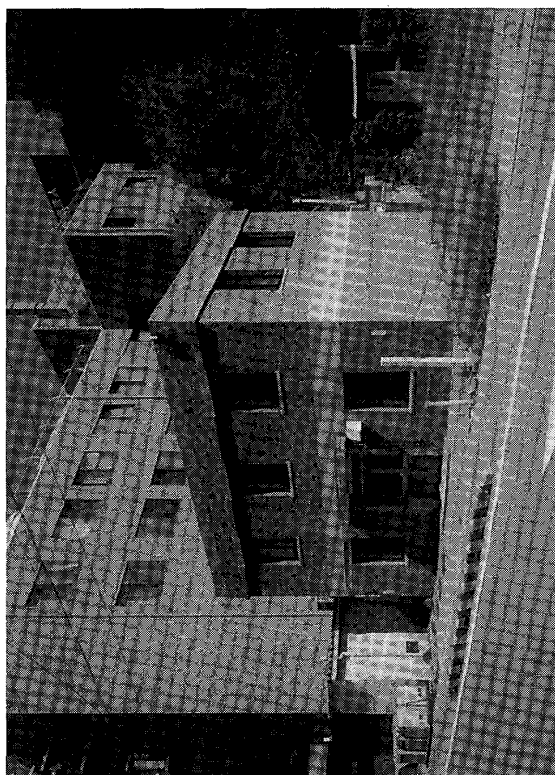


写真-9 全愛知県赤煉瓦工業協同組合



写真-10 同協同組合事務所2階会議室



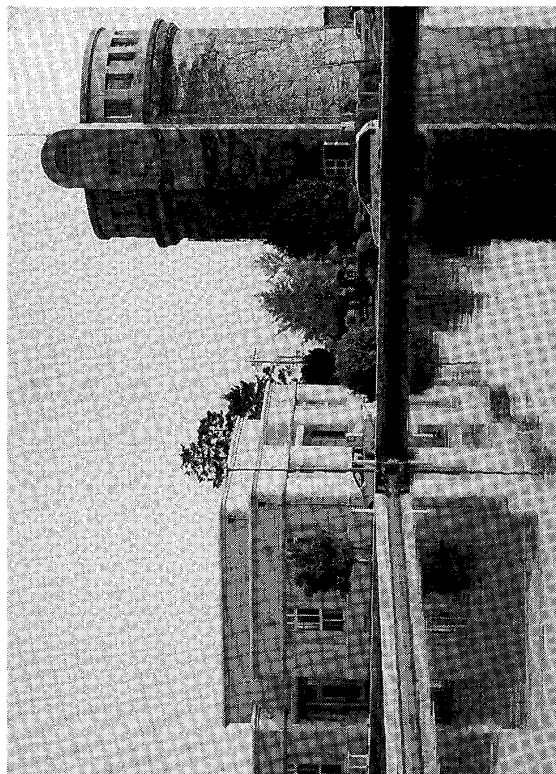


写真-13 岡崎市水道局六供浄水場外観

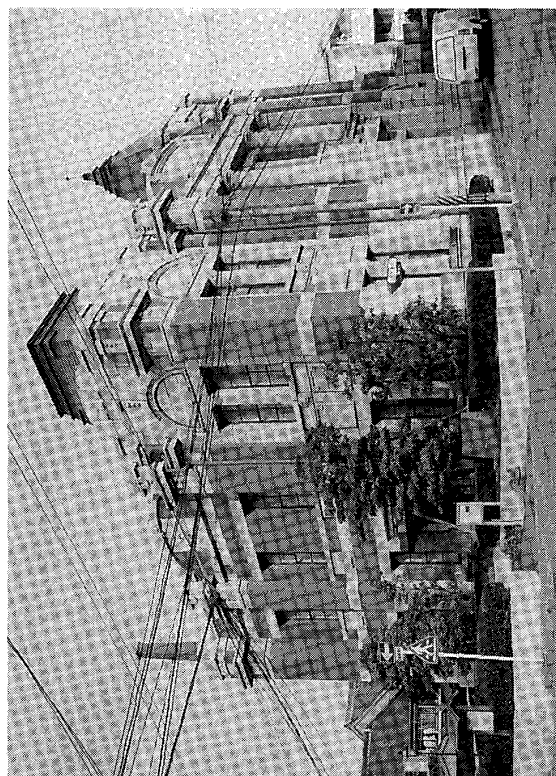


写真-15 岡崎信用金庫資料館南西外観

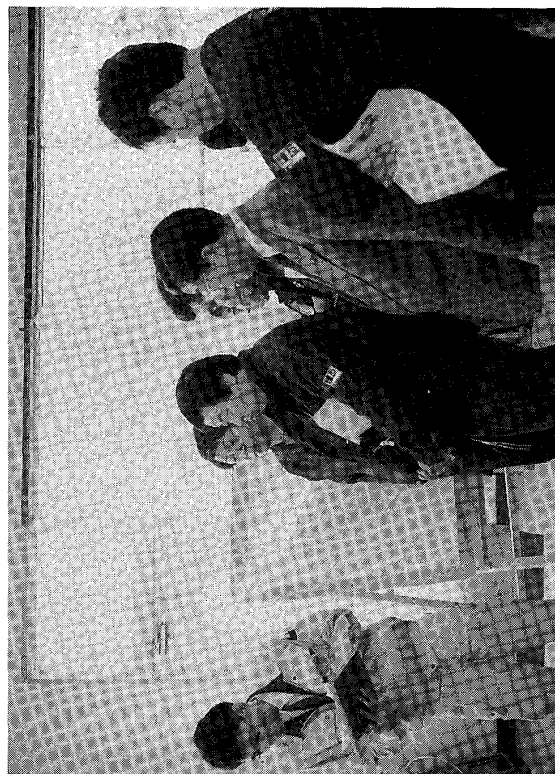


写真-14 同市水道局六供浄水場事務所

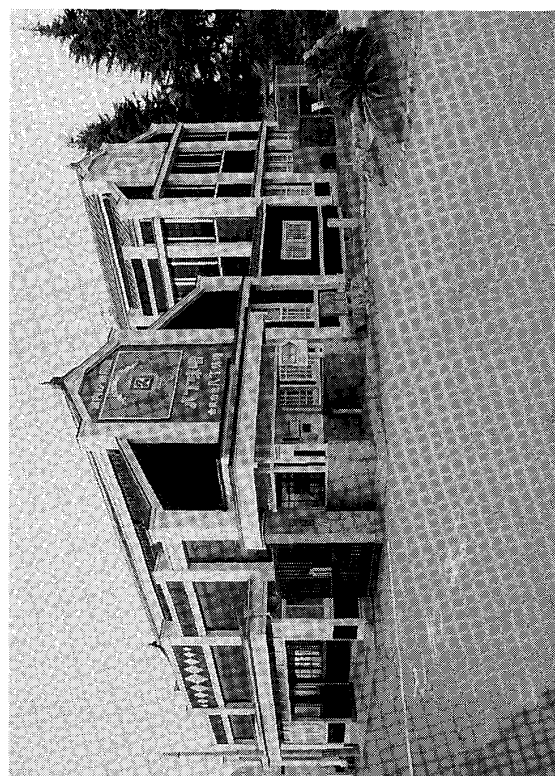


写真-16 カクキューー八丁味噌正面外観

18時00分から約2時間の時間帯で室内における学習会という形式で行なわれた。会場となった建物は写真-9に掲げる全愛知県赤煉瓦工業協同組合<sup>10)</sup>である。同建築物は愛知県碧南市新川町3丁目85番地に所在し、今日もこの工業協同組合の本事務所として定常的に使用されている。この建物は、当時の愛知県赤煉瓦工業協同組合（現在の名称とは異なり、「全」の文字が付かない）員が煉瓦の現物を提供して建設した。外壁を構成する煉瓦は岡本煉瓦株式会社と長谷煉瓦株式会社2社を中心として、株式会社石橋を加えた碧南市内3社の各社が、自社の製品を持ち寄って新築した。運搬手段が今日ほど発達していなかった当時、他の組合員は製品ではなく費用を負担したという。したがって当該煉瓦造建築物は、このように歴史的な煉瓦造建築物である。当該建築物の竣工年は、昭和28年と伝えられる。平成15年には完成してから満半世紀を経過するので、50周年記念の企画を催すべきであろうと考える。

第3回「煉瓦とまちづくり研究会」は同組合2階にある会議室で開催された。開会直前のようすを、写真-10に掲載する。当日の学習会で主題とされた煉瓦建築は、静岡県における実例3物件、全棟数にして10棟であった。それらは静岡県島田市稲荷1丁目13番地18号の株式会社北河製品所に現役の化学工場として使われている煉瓦造8棟、同じく島田市横井4丁目の東海パルプ株式会社横井工場（旧官営島田紡績所跡地）の1棟、そして静岡県榛原郡中川根町地名に残る旧東海紙料株式会社島田工場（東海パルプ株式会社横井工場）地名発電所の1棟であった。

順を追って紹介する。最初の株式会社北河製品所<sup>11)</sup>には明治31年頃に建造されたと見られる塗料倉庫（旧醋酸繊維素塗料工場ならびに旧醋酸アミール合成・精製工場）や旧塗料試験室から始まって、昭和10年頃に完成したと考えられる11号倉庫まで8棟の煉瓦造建築物が現存している。竣工年代の幅の広さ、そして各建築物の意匠がすべて違うという変化に富んだデザインをもつ。このような事例は全国的にも極めて珍しいと思われる。

北河製品所は大井川の左岸に直接面した場所であるが、次の東海パルプ株式会社横井工場はJR東海道本線島田駅の南側に位置する。この敷地内に大正8年竣工の赤煉瓦の倉庫建築<sup>12)</sup>が1棟現在も使用されている。

島田市内から離れ大井川に沿って北上すると、静岡県榛原郡中川根町の地名（じな・ちな）地区に旧地名発電所<sup>13)</sup>がある。この煉瓦造建築は本稿で示す他の事例と同様に、外観にも建築用普通煉瓦を積み上げて見せるデザインである。そのため高い壁面が上から下まで、煉瓦の赤い色で覆われている。そのうえ元来の用途が水力発電所であるため規模が大きく、見るものによっては赤煉瓦壁の鮮やかな印象は一層強いものとなる。

屋根は切妻（きりづま）・大波垂鉛引き（あえんメッキ）鉄板つまりトタン葺（ふ）きである。切妻という屋根の形式は、水平方向に構えられた棟（むね・屋根の最上部）から2面の傾斜面が左右両方向に広がる形状の屋根である。屋根を支える骨組である小屋組は、木造の洋風小屋組の中でも対束（ついでつか）小屋組（クイーン・ポスト・トラス）と呼ばれる構造である。対束小屋組は2本の小屋束（対束：クイーン・ポスト）が1つのペアとして対峙するような位

置に配置されて、陸梁（ろくばり・水平な梁）の上に垂直に組まれた独特の小屋組である。

旧地名発電所が竣工したのは明治43年5月のことで、実際に発電をしていた時期は2回あった。1期は明治43年（1910）10月から昭和19年（1944）までの44年間である。2期目は昭和24年（1949）に発電を再開して、同35年（1960）12月までの11年間続けられた。設計者は不詳だが、施工を担当した大倉土木組の技術者であった大泉龍之輔の設計ではなかろうか。

秋季の「煉瓦とまちづくり研究会」見学会は、平成13年（2001）11月13日（火）に岡崎市内を見学先として実施された。写真-13として外観写真を掲載する岡崎市水道局六供（ろくく）浄水場<sup>14)</sup>は煉瓦造の構造物ではなく、昭和の初年に完成した鉄筋コンクリート造タイル貼りの上水道施設である。写真の左側に見られる1階建ての浄水場ポンプ室は昭和8年（1933）の完工で、画面右手に位置する背の高い配水塔は翌年の昭和9年（1934）に竣工している。煉瓦造建築が主流であった時代から鉄筋コンクリート構造の建築へと変遷する過程において、建築作品の外装をどのような素材で処理するのかという大きな課題が生じた。この解決策として煉瓦建築の表積み化粧（おもてづみけしょう）煉瓦ではなく、外装タイルを新たに焼成して建築物の外観に貼ることで、新時代のデザインを前面に押し出してくる。この時代の好例が、岡崎市水道局六供浄水場のポンプ室なのである。

写真-14は同市水道局六供浄水場の事務棟において、市水道局の職員から説明を受けているようすである。外観の写真を紹介する紙面の余裕はないが、当該事務所棟は前述の2建築物外観とデザインを揃えている。同建物は平成6年に竣工したばかりの現代建築であるが、昭和初期の建築様式と建築材料に馴染むよう特別の配慮が成されている。

岡崎市内の見学会で2棟目に訪問したのは、写真-15に掲げる岡崎信用金庫資料館<sup>15)</sup>である。この銀行建築は、前述した名古屋高等工業学校の教授であった鈴木禎次の設計、名古屋の志水組の施工で大正6年に完成している。竣工当初の用途は、岡崎銀行の本店であった。昭和20年の空襲をうけ、焼け残ったのは壁体を積み上げていた煉瓦だけであった。第二次世界大戦後に屋根を架け直して、岡崎商工会議所として一時使われた。現在は貨幣ほかの収蔵・展示・公開のための施設となっている。このように長い歴史の中で幾度も活用され続ける背景としては、当該建築物が岡崎市伝馬通1丁目58番地という都心に位置している点のほか、煉瓦という建築材料が火災に強いだけでなく、長い年月の耐久力を有していることによる。なお見学に際しては岡崎信用金庫営業統括部に所属する同資料館の星野鋭志館長に御案内いただいた。

平成13年「煉瓦とまちづくり研究会」第4回集会最後の見学先は、煉瓦の建築物ではないが地域社会の中で人々に親しまれている西洋館を選んだ。カクキュー八丁味噌の木造西洋館<sup>16)</sup>（写真-16参照）である。この建物は昭和2年（1927）11月に完成し、事務所棟と呼ばれる。

次に「煉瓦とまちづくり研究会」における今後の研究会や学習会の予定について触れておきたい。平成14年（2002）1月28日（月）さらに同年3月25日（月）の両日にも研究会がもたれる。1月28日には本年度最後の見学会が予定されている。1月28日の午前中から愛知県碧南市を出発して、岐阜市内の煉瓦建築を訪問する計画である。岐阜市における見学会は、最初に画

廊石原の煉瓦ビル・有限会社石原美術かつての日下部同族合資会社社屋を訪れる。その後、名和昆虫博物館ならびに名和昆虫記念館および昆虫碑を見学する。いずれの作品も京都帝国大学工学部建築学科を開いたことで著名な建築家・武田五一が手がけた優れた建築作品である。

それぞれの竣工年を列記すると、年代の古い順に名和昆虫記念館が明治40年(1907)6月、画廊石原大正3年(1914)、昆虫碑は同6年(1917)10月、名和昆虫博物館も同じく大正8年(1919)の4月である。いずれも武田五一の設計で、一つの都市に有名建築家の作品群が集まって残っているという事例は貴重である。将来のまちづくりで都市の個性をひき出す大きな要素と成り得よう。

さらに「煉瓦とまちづくり研究会」は平成14年(2002)3月25日に、年度末の学習会を屋内において開催する。日本国内において赤煉瓦の魅力を活かしたまちづくりや都市計画を展開・継続している全国の各都市を話題にする予定である。

なお来年度は三重県内に残る煉瓦造の建築物を、民間企業が再利用した商業施設などについても見学・研究の対象に加えたいという意見が出されている。本年度は現地で見学したものとしては愛知県名古屋市、岡崎市、碧南市、岐阜県岐阜市であった。そして室内の学習会において研究対象としては静岡県やその他の全国地方都市の実例であった。研究会の会員には、本年度だけでは成し得なかった内容をもっと充実させたいという強い希望がある。したがって来年度以降も積極的な研究会活動が継続されるものと思われる。しかも同研究会メンバーの問題意識は、煉瓦造建築物の歴史的な側面以上に、今日的な再利用の仕方がどのようにあるべきかという現代の都市生活との関わりにシフトしつつあるようだ。

なお「煉瓦とまちづくり研究会」定例の見学学習会とは少し性格を異にするが、平成13年8月にも赤煉瓦建築物の見学会を計画していた。その具体的な内容は碧南市議会議員団が北海道内の赤煉瓦建築物を訪ねて視察するというもので、半ばまで実行に移された。

会派視察研修計画書によれば、新政クラブからの研修者として碧南市議会議員の樫山光徳氏、同じく鏑木達朗氏、同じく鈴木宏枝氏、同じく禰宜田政信氏、同じく倉内成幸氏、同じく鈴木實則氏、同じく杉浦郁雄氏、同じく久田昭一氏、同じく原田ちよ子氏、同じく陣弓騎昌氏、同じく木村健吾氏、同じく宮地孝次氏、同じく村田峰治氏、同じく島崎一徳氏、同じく神谷由太郎氏、同じく磯貝幸雄(原文では幸男)氏の合計16名、島崎一徳氏は碧南市議会議長と記されている。そして研修先は北海道江別市であり、目的は地場産業の振興について、とされている。さらに、研修事項 レンガを生かした街作りに至る経緯について レンガを生かした街作りの全体計画について 事業の概要について 事業費並びに財源内訳について 運営主体及び職員配置について 今後の方向性及び課題について、以上6項目である。

具体的な研修内容は、平成13年8月19日(日)から21日(火)までの2泊3日の旅程である。8月19日に道内入りを果たして、稚内方面を目指して北上。陸路途中の手塩川民俗資料館(写真-17参照)に立ち寄ったもようである。この煉瓦造建築物は第二次世界大戦後の昭和26年に同町の町役場庁舎として新築されたものを、後年に民俗資料館として再利用している好例と言



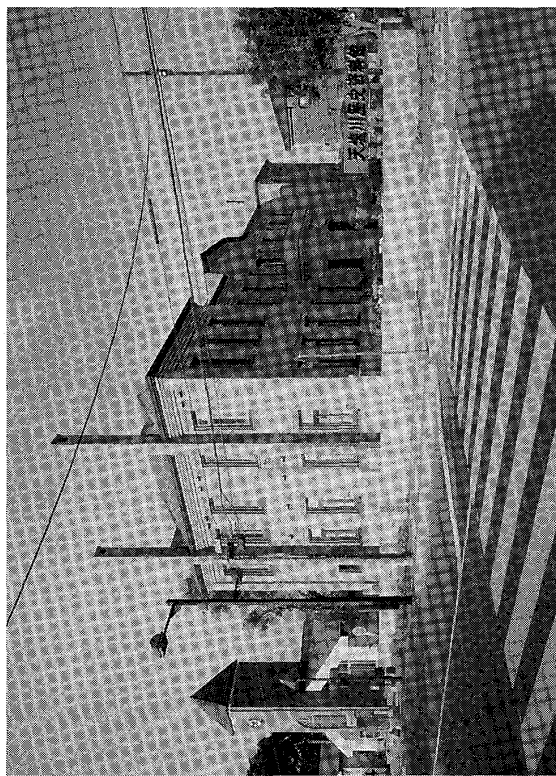


写真-17 手塩川民俗資料館南西面外観

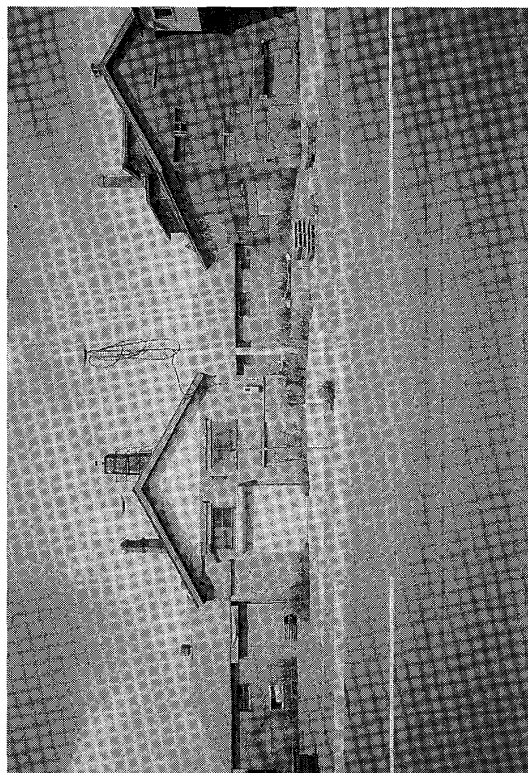


写真-19 江別市野幌地区の旧肥田工場

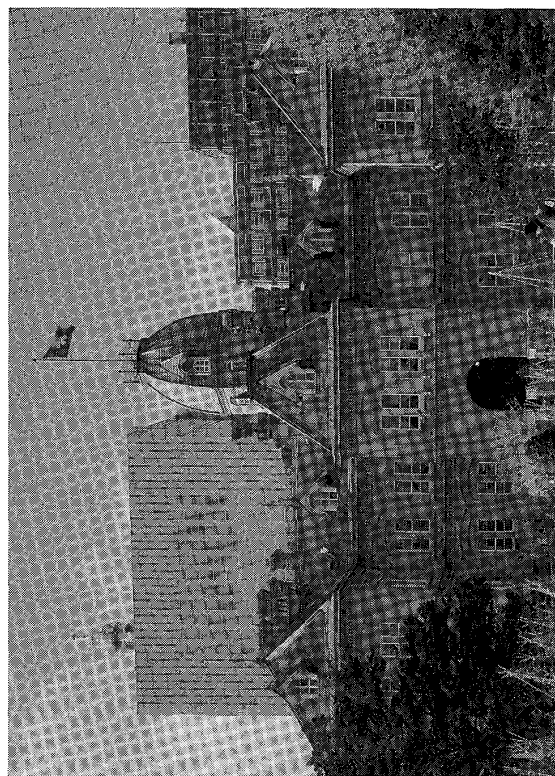


写真-18 旧北海道庁舎の東側正面外観

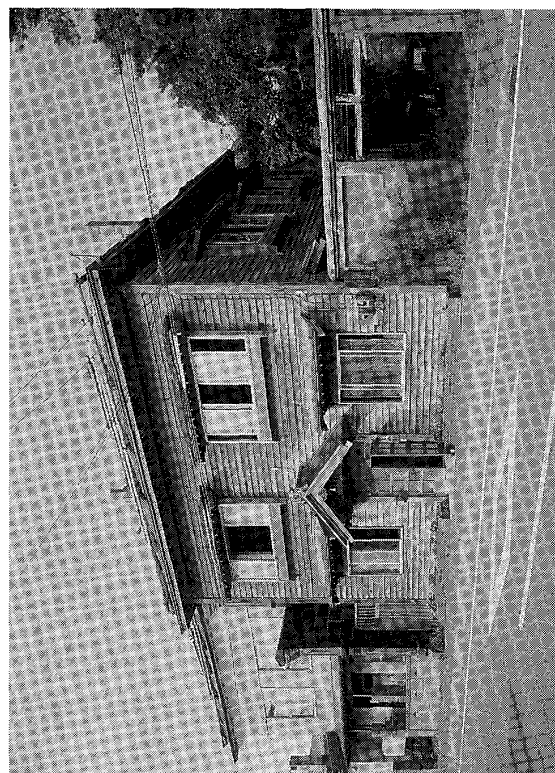


写真-20 江別市江別地区旧岡田邸外観



えよう。

翌20日（月）に札幌で宿泊。引き続いて最終日である8月21日（火）、写真-18に掲げる旧北海道庁舎（明治19年7月15日着工、同21年12月14日完工）<sup>17)</sup>をはじめとしサッポロファクトリー、さらにサッポロビール博物館を含む札幌市内煉瓦造近代建築再利用事例3物件を朝から見学した後に江別市を訪問する予定であった。しかしながら8月20日（月）の道北地方から札幌市内の宿泊先へバスで移動中に急遽、航空券の手配が出来しだい、可能な限り早く愛知県へ帰ることにするという旅程の変更が決定される。このような変更の理由は、大型で強い台風11号<sup>18)</sup>がその日の夜、四国の南海上を北上しつつあったためである。さらに翌日21日夕刻には、四国から紀伊半島にかけての地域に上陸する恐れがあった。そして北日本に向けて日本列島を縦断するものと予想されていた。

このような気象条件の急激な変化の中、当初の予定通りに江別市内の煉瓦造建築物の視察研修を実施し終えた後の時刻では、新千歳空港から名古屋空港へ向けて飛ぶフライトが欠航する可能性が大きいと考えられたのである。このため8月20日（月）午後、道北から札幌への車中、市議会議員団としては、可能な限り早期に名古屋空港もしくは東京（羽田）空港など本州へ飛ぶことのできる便を確保することに努めるという判断をした。21日午後のフライトでは大幅な航空路線の欠航が生じるであろうことが、既に強く懸念されたからである。

結果として8月21日の朝、北海道視察に来ていた碧南市議会議員全員が無事、名古屋空港へ降り立つことができた。したがって「煉瓦とまちづくり研究会」としては、碧南市議会議員団の江別市訪問が今後いずれかの時期に実現されるべき課題として残されることとなった。その視察が実現する際には、江別市が今すすめようとしている旧れんが工場（写真-19参照）の見学などは重要な行程として組み込まれるべきであろう。同工場跡はJR野幌駅とJR高砂駅に挟まれた函館本線の南側に隣接する旧肥田（ひだ）工場である。

また煉瓦を活かしたまちづくりを推進しつつある市民団体、「NPOやきもの21」という組織との人的交流や情報交換も当然のことながら必要なものになると考えられる。NPOとは都道府県知事から正式に法人格を承認された、非営利特定活動法人を意味する英語名の頭文字を略称としたものである。「NPOやきもの21」の場合は、例年継続して実施されている「えべつやきもの市」の実行委員会事務局を担当するなど中心的存在として関与する一方、地域産業の製品である煉瓦を積極的に都市の個性として活かしたいと考える市民の組織である。つまり食器などの「器（うつわ）」としての焼き物だけでなく、煉瓦やセラミック・ブロックなど建築材料としての焼き物にも意識を注ぐ市民まちづくり団体である。この「NPOやきもの21」事務局が置かれている江別市江別地区の旧岡田邸外観を、写真-20に掲載しておく。

北海道の話題とは直接関係のない別件であるが、平成13年11月3日（土）から12月2日（日）まで豊田市陣中町1丁目21番地2号の豊田市郷土資料館において『特別展「舎蜜から化学技術へ 近代技術を拓いた男・宇都宮三郎」展』が開かれた。宇都宮は尾張藩出身の武士であったが、明治維新後は明治政府の技術官吏として近代的な国内産業の育成に尽力した。とりわけ窯

業や醸造業など応用化学分野において、その功績が顕著であった。また彼は“化学”の命名者としても広くその名を知られる。

今回の特別展では同郷土資料館の天野博之学芸員による配慮で、明治10年代半ばに愛知県三河地方で製造された煉瓦が展示された。それは宇都宮が東洋組と称した煉瓦会社において、指導的な役割を果たしていた関係からである。なお展示用として実物の刻印入り東洋組製煉瓦を今回提供したのは、愛知県安城市の株式会社三島煉瓦製造所であった。

## 結論

「煉瓦とまちづくり研究会」の活動内容には、きわめて注目に値する点がある。まちづくりに対する非常に積極的な態度を感じとることができる。江別市の市議会議員団が他の都市へ、歴史的煉瓦造建築物の視察に出向くような継続的姿勢が実施されているであろうか。

むしろ当江別市においては、上記とは全く異なる路線を歩んできたことが知られている。江別では、本稿で詳述した三河地方のように地道な学習活動ではなく、取り急ぎ煉瓦造建築の買い取り・保存活動をより積極的に推進してきたという経緯がある。

碧南市と江別市の対応の差には、緊急性に対する判断の違いが現れているようで実に興味深い。あるいは東海地方と北海道という土地柄の相違によるものなのであろうか。

どちらか一方が正解であり、残る他方が誤りであるというような短絡的な判断は勿論、大きな危険を含んでいる。しかし以上のように詳細に比較してみると、江別市の試みと愛知県三河地方の活動の相違点が明らかになってくる。そして双方それぞれにおいて、まだ足りない点が残されていることが見えてくる。今後はそれぞれが立ち遅れている点、不十分な面を将来の課題とすれば良いであろう。

本稿をまとめるに際して、実に多くの方々から適切な助言と多大の御協力をいただいた。この紙面を借りて謝意を表するものである。なお本研究は平成13年度の北海道浅井学園大学特別研究の指定を受けた。末尾になってしまったが、あわせてここに謝辞を述べる次第である。

## 注

- 1) 『RED BRICK 赤煉瓦ネットワーク物語』馬場英男・内藤恒平・仲原生ほか、公職研、2000年3月30日
- 2) 『京都の赤レンガ＜近代化遺産＞』日向進・前久夫、京都新聞社、1997年8月10日
- 3) 『舞鶴の近代化遺産』舞鶴市教育委員会社会教育課、舞鶴市・舞鶴市教育委員会、平成13年3月
- 4) 『江別れんがアラカルト れんがの建物・道・公園』石垣秀人、江別まちづくりフォーラム、1992年3月
- 5) 『名古屋市市政資料館』テクノ アート リサーチ、名古屋市市政資料館、平成9年8月、P-16

- 6) 『新版 日本近代建築総覧』日本建築学会，技報堂出版，1989年7月30日，P-256
- 7) 「ノリタケカンパニーの旧製土工場について」野口英一郎ほか2名，『日本建築学会関東支部研究選集 2』日本建築学会関東支部研究選集運営委員会，日本建築学会関東支部，1993年7月，PP.227-230
- 8) 『岡田煉瓦100年史』岡田煉瓦100年史編集委員会，岡田煉瓦製造所，平成9年11月27日
- 9) 『「産業技術記念館」総合案内』エス・ティー・シー，産業技術記念館，1994年6月1日，P-9
- 10) 『OLD & NEW 赤煉瓦の情景』全愛知県赤煉瓦工業協同組合，同協同組合，平成10年，P-22。なお使用されている煉瓦の製造所に関しては，株式会社三島煉瓦製造所の三島文男社長からの御教示による。
- 11) 「北河製品所赤れんが工場建築群の歴史的価値」野口英一郎ほか，『シンポジウム「島田の歴史と産業遺産」講演報告資料集』中部産業遺産研究会，中部産業遺産研究会，1997年6月14日，PP.1-16
- 12) 「近代繊維産業のあけぼの 島田紡績所をめぐって」大河内信夫，『シンポジウム「島田の歴史と産業遺産」講演報告資料集』中部産業遺産研究会，中部産業遺産研究会，1997年6月14日，PP.20-34
- 13) 「地名発電所の赤れんが建物について」野口英一郎ほか，『シンポジウム「日本の技術史をみる眼」第17回 地名の産業遺産と地域文化 大井川流域初期の発電所遺構の歴史的価値と地域文化 講演報告資料』シンポジウム「日本の技術史をみる眼」第17回実行委員会，中部産業遺産研究会，1998年9月26日，PP.9-22
- 14) 『近代を歩く いまも息づく東海の建築・土木遺産』東海近代遺産研究会，ひくまの出版，1994年9月15日，PP.126-127
- 15) 『近代建築ガイドブック [東海・北陸編]』瀬口哲夫・竺覚暁，鹿島出版会，昭和60年7月10日，P.99
- 16) 『建物の見方・しらべ方 近代産業建築』日本産業遺産研究会・文化庁歴史的建造物調査研究会，ぎょうせい1998年7月30日，PP.110-111
- 17) 『重要文化財北海道庁旧本庁舎復原改修工事報告書』北海道総務部，北海道，昭和45年3月31日，P-3
- 18) 『北海道新聞 2001年（平成13年）8月21日』北海道新聞社，北海道新聞社，2001年8月21日